

911.3
八
6

俳諧歌雙兒百首

自六卷
至十卷



一貫
卷之二

おうつみ事まこと、も、お、おおつまきもまだよき

名古屋

長

おひすまはねはねとくにと、のれとたんくら人

新井

裏機

おれいくのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうと

水谷

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

鉢田

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

太田原

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

豆人

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

景山

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

鳴音

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

歌志久

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

麻生

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

吟阿

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

千穎

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

真恵美

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

京

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

甲府

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

京

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

薄墨

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

奥半田

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

真富貴

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

全保原

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

隣

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

山形

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

氣仙沼

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

真富貴

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

柳

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

新庄

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

水戸

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

信玄

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

全八幡

おれい

おれいのあらわしあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

真貫

若城

眞酒房

水津

棚倉

高川

白川

全

根

盛

酒

久

年

碑

田沼

吉田

辻

大

或

えもんを移のねても西へが急ぐをうへのそりを
あそハ傳とぞきに難處整そよん所が在る
もの無れなどとて此處もんち和歌をよみて
移布の里ふ袖布ぬづまは陽ひどくをあらん
移う事と隠ふきくれきく取扱う經脚うるを
かく移のうげきハ往のゆうあれ山後のうらを
後が里ふ袖布うらをまくへとへかく移う
きうとハ代あくふおつとくとひと相手へと移
人うと歌ふ婦うかとすらゆ耳かあ。あめうと
白布をむきとて縫のせよハウキとし移うと
機麻のうつうを終ふあらすまとあらうと
男うと相のうと初歎の聲うやかぬがま
移布の移布へとせうと事あらすまとあらうと
うのうと見せ相を相傳うともうだいとてゆきと
水戸 友 雄

喜入さむちとおがくは、まことの心をもれどぞうの母 朱人
喜の日生むつもくわが故郷をもじりておまざるを
かゆくまつては御機うちめと少佐をおきぬふ 甲府
少将徳をうへまよたとぞあくがくみやをひく乳房 久
妻ゆどひをぎそくほれからん機のまへ御おほりく
きくも御うねまよた庵をうそかまくすうめにり
浦あみのわせぬ夜をまくと故のよみをうけらん 三浦
今夜も岡菴のとよはせぬくらしきよをうゆね秋宿 信濃
虫

波那細

仙臺

大園

水戸

盛

葉

全

喜徳加世喜徳加世のあふまれく御めんが御不景ひきの虫
行うとゆのゆふうじときえくとゆく林穂乃出 全
移穂のせうくゆくはくもれぐそくもせふりむ 真和
幸かず仲をゆかみのまのむせうふまきゆかえ 真直

裏紙

新庄

入

弦

長岡

住

歌

山

花

歌

坂老岡

二

歌

川又

昌

歌

太田原

春

歌

仙臺

唐

歌

東折

文

歌

金美都

九

歌

上毛長祖

教實

歌

天童

美鳥

歌

詠方

撲

多々くわみの出の生むはおなまへおもて乃る

名古屋
仙臺
神代
幾代
秋

えもつまぬをなきり、婢もひきもとぞきく

市川
會津
常陸

湯まのせぬのち、底無く、例へばともちと見えむ

磐田
貫戸丸

秋がたれましゆをかづれも多はほまくも

年
久

あがくよすくせぬ不撫まふらやめの雨もまかん

吉田
千

あがくよすくせぬ不撫まふらやめの雨もまかん

山形
玉

風がさす物かなく、行の雨くさぬ松の木の森

善
繁

風がさす物かなく、行の雨くさぬ松の木の森

長崎
玉

歌坐をせり、ゆくと見だす席下の車の匂い

真
砂

穏居とゆきかずかく、歌の余音がけくもかくも

鳴
音

押す出はゆく、歌の余音がけくもかくもかくも

光
貞

細代はあれども、歌の餘音へむかはすかくも

照
道

ゆめをゆき美のすの歌代はのすじかくもかくも

京
舟

ゆめをゆき美のすの歌代はのすじかくもかくも

雑
三津

まうすくせぬのすの歌代はのすじかくもかくも

吹
成

菊

波耶細

裏檄加並三

多
内
西
村上
大
道
人
信
仁
熊
下
今
町
直
樹
村
大
坂
岐
阜
駿
山
人
綾
臣
本
藝
吹
成

ありとまことに此の事の如きはあらわす

全 薄果

牛岡がお詫びをうむてねむむむむむむむむ

全 小舟山

娘の手井の孫の手井高成はあらわす

全 穂高

萬の手井の孫の手井高成はあらわす

全 芳

是も手井の孫の手井高成はあらわす

全 三崎

手井の孫の手井高成はあらわす

全 太田原

手井の孫の手井高成はあらわす

全 長岡

手井の孫の手井高成はあらわす

全 花

手井の孫の手井高成はあらわす

全 甲府

手井の孫の手井高成はあらわす

全 泉

手井の孫の手井高成はあらわす

全 城人

手井の孫の手井高成はあらわす

全 長人

手井の孫の手井高成はあらわす

全 入

手井の孫の手井高成はあらわす

全 真須躬

手井の孫の手井高成はあらわす

全 藤沢

手井の孫の手井高成はあらわす

全 高成

手井の孫の手井高成はあらわす

全 子

手井の孫の手井高成はあらわす

全 宮庄

手井の孫の手井高成はあらわす

全 真牛

手井の孫の手井高成はあらわす

全 穂高

手井の孫の手井高成はあらわす

全 山形

手井の孫の手井高成はあらわす

全 松年

手井の孫の手井高成はあらわす

全 市川道則

手井の孫の手井高成はあらわす

全 常造

暗譜

あれどもおは日暮をなすてうれしや
むらのものもあらひがせどとくへよみせぬ園
情あそぐのゆきあらまゆきをかねのまつる葉

壽

波那細

紅葉

岩城

長人

ひづりてうせふのゆのむとをせとひとてうそく

仙臺

小俊

瀬川をゆく西と東のうらわありぬ秋のむす

新庄

真似子

みまのやとすゆのまきくじの社と瀬川中の風

岩城

為長

あはうへあとすとどうたぬ秋のぎをこじに

新庄

真酒躬

ひとぬくのゆのまきをさがすれの跡

名古屋

真歌

まゆくゆのまきをさがすれの跡

新庄

真惠美

鳴音貞

ゆめくゆのまきをさがすれの跡

千住

米貞

うきだくゆのまきをさがすれの跡

新庄

真惠美

うきだくゆのまきをさがすれの跡

岩城

真惠美

うきだくゆのまきをさがすれの跡

佐渡

繁枝

うきだくゆのまきをさがすれの跡

新庄

真惠美

うきだくゆのまきをさがすれの跡

奥中源

益

うきだくゆのまきをさがすれの跡

柳田金

一亭

うきだくゆのまきをさがすれの跡

中頤

真似子

うきだくゆのまきをさがすれの跡

新庄

御俊

うきだくゆのまきをさがすれの跡

水戸

春媛

水戸
秋

勝

ましのぬまじを六連不世種と並んで雄不弔のましむ 秋 勝

光

本の事あまきやじくが風もれわへ秋の陵にうね 光

尚

三の殿神門うだくまくせむれのあれふゑとむとぞ
目妙加花一

仙墓

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

水戸

内

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

洲

近

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

長

来

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

武

代

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

鳥

徳

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

住

志岡

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

繁

盛岡

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

門

入

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

春

葛

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

真

人

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

牛

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

麻生

歌志久

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

都鳥園

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

曜

真似子

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

成

文

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

樹

山

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

印西

百合丸

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

庄内

うどくまくせむれの秋の引れかはこへ後事半とめかくへ

川又

蟲丸

たをひじりとせざうと戸唐毛打代をまへるあひり
きまゆる事もハあとくやのよしにやのゆのゆ
初音ハシヨー音のゆきえどひのゆきすとも 離 棚

市川 常道

時雨

水戸 離 棚

波那細

時雨とほとく人を移すとまち一づれうね 真似子

材空の移の處の時をればあゆまぬの遙もむかう
裏微^三加花^三 と厚のねぬがあれとぞとく遙^二少林^一 菊^三 家上^二 庄内^一 央

元 李

時雨は日と出されく材空の種もうきとくさうり
裏微^三 加花^三 と厚のねぬがあれとぞとく遙^二少林^一 菊^三 家上^二 庄内^一 央

新庄 真國

元

李

時雨は日と出されく材空の種もうきとくさうり
裏微^三 加花^三 と厚のねぬがあれとぞとく遙^二少林^一 菊^三 家上^二 庄内^一 央

新庄 真國

元 李

時雨は日と出されく材空の種もうきとくさうり
裏微^三 加花^三 と厚のねぬがあれとぞとく遙^二少林^一 菊^三 家上^二 庄内^一 央

新庄 真國

元 李

目拟

時雨とわくまかずかず中をふるひとおれやうとみん 真村

仁熊

ときと聲の時のうす裡人やうとまをきせのゆうつ 廣庭

三崎

移移と時雨がかる旅人やうとまをきせのゆうつ 廣庭

芳

あひの秋のまゐるがからまゐるどもの旅とゆふ時雨

太田原

ほあげーおまを風ふらひと時雨のまゆおりくみん 新庄

小

時雨り少くひくうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 相良柳

素直

傘うちふきとまとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 京

長岡

鴨半^三と鴨半^三とまとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 真恵美

會津

鴨半^三と鴨半^三とまとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 真恵美

若山

たゞ月とくうとくまとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

庄内

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

明

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

庄内

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

博厚

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

有義

時雨とわくまかずかず中をふるひとおれやうとみん 真村

仁熊

ときと聲の時のうす裡人やうとまをきせのゆうつ 廣庭

三崎

移移と時雨がかる旅人やうとまをきせのゆうつ 廣庭

芳

あひの秋のまゐるがからまゐるどもの旅とゆふ時雨

太田原

ほあげーおまを風ふらひと時雨のまゆおりくみん 新庄

小

時雨り少くひくうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 相良柳

素直

傘うちふきとまとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 京

長岡

鴨半^三と鴨半^三とまとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 真恵美

會津

鴨半^三と鴨半^三とまとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 真恵美

若山

たゞ月とくうとくまとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

庄内

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

明

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

庄内

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

博厚

まとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐりうくもとめぐり日暮ハ暮りふるん 神田

有義

ねあうはまくわくとあるまみの村はるか
廣

北

色あぐ人の手をひくとあらわす川音

川

神をまつて祭事もまぎれり是もせじはるうし

真

たものこれとひそむてはるの遠かにゆきの秋財も

直

はるをまつて秋ハ冬むれおもてふうのゆき

麻生

歌志久

おとれほきをまつておのぞむれども秋のゆき

歌志久

おとれほきをまつておのぞむれども秋のゆき

全

三月のゆきがけりきのくちをめでて水戸あされ

水戸

三月のゆきがけりきのくちをめでて水戸あされ

洲

波那細

新庄

年の年をうし方のゆく風うまれるみゆのひゆ

真

裏微加丸三

柴

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

庄内

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

吾

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

丸

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

信

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

神代

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

歌

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

新

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

棚倉

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

元

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

神代

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

歌

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

駿府

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

名

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

技

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

入

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

長岡

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

藤木

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

新

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

千

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

崔

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

大道

さやかにまづくとまよせすゆのゆきをまづく

真恵美

霰

裏微加丸二

仁熊

真村

月が山の木の葉の下に併せ送りあつてやまつて
名の月のをまよひ落べりてゆふあそせむとくわくこそとく

最時

月彦

行絶も枝のくえあとまきわからぬをそのねび枝

全

陀房

作りゆくものとゆくはとくとくわからぬをそのねび枝

水戸

春俊

枝がくねの様を蹶きくとくもあきらゆくとくも

菱田

真毒内

ねを利かれども世の中とあわどきはゆくとくも

伊戸

益若

中とく風かく酒の松の松のうさあがまのゆがうう

坂井

塘

それ木の種はるもふかじきとむのゆがくとくのゆがく

室田

歌獨

穂とくとくわれをふかくとくとくわれをふかくとく

市川

彩路

ねひくとくとくわまひくハあみがとくとくとくとくとく

小屋敷

大路

あらぐとくとくわみのあうとくとくとくとくとくとく

岩城

頬尾丸

埋もすとくとくわみのとくとくとくとくとくとくとく

白川

長人

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

折雀

を年と前とまわづとくとくとくとくとくとくとくとく

藤沢

廣喜

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

福島

梅盛

柳本とあるはくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

全

三千春

ほ度つとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

新庄

柴

山本とあるとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

佐渡

高畑

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

仙臺

歌以九

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

佐夏

駄山人

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

成

牛

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

岐阜

俊

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

佐渡

成

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

越後序町

成

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

風成

市川

美都成

桜井

石出

河鳥

岐阜

支那

千本

俊

官崎

美真

成

道則

水戸

難

拠

梅信

貞雄

次

つゆの木きのひれが枝葉の内の中からとびでてさくら
うへてはやまあるをさきめにせせりてあわせば
うさみわがわがわがわとせよぎだまのまくも
娘の心のうすを仰つておこなむのゆゑを一長
かあーききの柳ふはのとあざうにねーをのひ後
ひそめかうめぐれり枝葉やむの木の枝をはる
後悔をそんとせてものぬこうとねふとくわせ
されまへがまふ新田の雪へかくとくもぞ咲
せむうのゆくたるがわ枝の木をとくがまつりたる
埋れく三種ともとせてものぬかまのまくらが
まのりはきくむとゆく管理をまどねるくまくらが
荷積す雪をかきたぬかくと一枚のじくの枝
草木をかきの雪をかきたぬかくとものぬがの
雪あふやうの枝をかくとねふとくわせく

初 雪

波那細

片倉

伊川

常

裏微加花三

塘

裏微加花二

神代

名

口経

大門

正

初

松

俊

初

辯三津

廣庭

守

有繁

貞

初

光

守

初

美都井

氣仙沼

初

半由

真富貴

初

氣仙沼

柳舟

あまねく人をあわせし秋の夜の邊へとおのづ初名

新庄

舟

化粧せし時雨のね、あわせてやうが和ふれと初名

美舟

舟

是故のつゝほどせんく初名とあらどゆて御も

伊戸

塘

露御のぬれはあらせとあをかきしたや邊の初名

水戸

窪

地かあへよされやせんといきとあみのふつゝと初名

小屋

卷

初めがぐるをとくからもの一は月とふれと初名

岩城

高

山御の露移ひどもちりむかはまにへてとくの初名

小曾戸

人

山居ああらふあとと黒轆とが様くねく初名の竹

神田

良

山居ああらふあとと黒轆とが様くねく初名の竹

坂

葉

日のあふくの宿もとくはなごくもとけのちゆく初名

丸

良

このあくたあくのゆくは初名とばらのあくの初名

左内

丸

りきとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

吾

丸

ちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

駄

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

坂

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

庭

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

守

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

立

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

春

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

真

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

鶴

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

雪

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

政

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

舞

丸

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

三

津

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

柳

舟

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

水

舟

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

川

舟

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

鳳

舟

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

光

舟

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

松

舟

初名ハちくとむとくはなごくの初名とばらのあくの初名

晴

舟

水戸洲

小田原

長廣

春則

真直

水戸

秀

日暮が花
萎葉

福

接井

河

鳥

日暮が花

養

伊勢屋

十字街

日暮
萎葉

月

最時

彦

日暮
萎葉

月

氣信

九

日暮
萎葉

月

越後小黒

日暮
萎葉

月

新庄

為

群

日暮
萎葉

月

相深見

九

日暮
萎葉

月

嘉亭

美

水記

斐

市川

河

戸塚

唐

村上

九

千鴻

春

三千

唐

若山

九

下

真

内

龜

野邊

夏

佐渡

本

麻生

歌志久

歌志久

きりくもあひのをまなむと小川水走て流すもあれ

鳴音

さうへと舞のをまを怪がせらば後退すもあれ

鈴繁

舞の波のやふかうひと多熱づれとまをめ

壽

裏被加花三

鈴虫

庄内

かりそまどのかわを波ちのまとまをまえがま

真牛

裏被加花二

新庄

まうわかまよまうまきと波とまをめ

為

目被加花一

刈谷

まうわかまよまうまきと波とまをめ

水枝

目被加花一

春

まうわかまよまうまきと波とまをめ

安

目被加花一

刈谷

まうわかまよまうまきと波とまをめ

丸

目被加花一

春

まうわかまよまうまきと波とまをめ

則

目被加花一

新庄

まうわかまよまうまきと波とまをめ

安

目被加花一

山邊

まうわかまよまうまきと波とまをめ

常

目被加花一

山邊

まうわかまよまうまきと波とまをめ

道

目被加花一

千

まうわかまよまうまきと波とまをめ

久

目被加花一

千

まうわかまよまうまきと波とまをめ

積

目被加花一

京

まうわかまよまうまきと波とまをめ

惠美

目被加花一

根

まうわかまよまうまきと波とまをめ

成

秋山

裏被加花三

岩城

まうわかまよまうまきと波とまをめ

暖丸

目被加花一

白川

まうわかまよまうまきと波とまをめ

高田

目被加花一

開

まうわかまよまうまきと波とまをめ

成

爲事をひつて、神のわざびと枝もあり秋のゆゑ、東上

柞

裏做加花三
茅も屋も似方紅葉へ村のあはれてもうかく血やまぶせん
日妙
紅葉見別さんと桜色ふともむきもれをれやまうる
長岡
入

葛

波那佃
秋風のあは入まえらへと歌くやうす茅のあまも
日妙
波那ど一た徑とくもす茅む家ねねうれはよみの危
サ政が三の代を先へ郷のれなせ「秋の茅あらわ
お事」さくらと附るよあかうねくねとれとれを
柳

京
春
船

小田原
氣沼弥

廣

柳

齊

水津
水哉哉

照道

庄内
出羽住

全

半田
薄墨

貴丸

春則

米川
真河

次

米川
薄墨

貴丸

春則

米川
薄墨

大

道

則

米川
薄墨

鬼

立

樂也

寒芦

裏做
経物で、経つた芦と冬の日によくうつ合へぬぞう
氣仙沼
竜門

廣庭

風流風ふ奈一経はのむく風をひく

水戸洲

長

歌ふれり遊波の音ハオカのひもかとえをまよふ

麻生

琴富貴

笛ふねを移處のやハ松がうさきわらはり波の聲ふ

氣仙沼

歌志久

波が一葉は波の芦の移ハ日あけをかれらぐれ

貢

柳

松葉太風の波をえきの音く葉かうれどめよ

全

通

空を移し風をれて遊波からうひとくはれ松葉

白川

柳

葉の波の葉のや葉移の葉の葉の葉をくまつてよ

名古屋

齊

波の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

酒

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

三崎

影

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

芳

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

伊勢津

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

富

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

吉田

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

天神林

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

元

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

保

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

左原

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

貞川

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

白川

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

水戸

通

葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉をくまつてよ

仁熊

通

千鳥

四十八

天童

鳥

誠方

鳥

名古屋

鳥

京

鳥

大肆

鳥

勝美

鳥

照道

鳥

左原

鳥

根

鳥

豆子根木の山川をすくめにせなまくとれに

数成

波那細

水

打打打水をさむる山川はけ地のつらえます難事 枝成

裏微加花三

山形

枝成

山川をすくめやくはればあつてあをれむかわすく

真長

裏微加花二

清澄

真長

枝成を後せすあねの名余ふかく水移の事移の所

群子

山形

清澄

今の世を女ゆづりてよしとひの水ハ水のふたり

小田原

群子

名の難事をゆきも善水をかくみの魔移へ

弘廣

小田原

みすづよしとゆがうすく水をその御ハシナクすまう

寿

桃実

泉の水岸の御をゆきとく風のすくみハヤセぬ川本

水戸

桃実

日妙をひづ水のきをあめかしてあめのねきの日妙

群子

群子

事のゆきとひげをすき水を往後取れかすうす

真直

真直

泉の水くまじやまくすむゆすゆくもの動くす

全

ゆくあるあくびのびく水すふれよ水の河川 うか 鳴音

新庄

為長

御まへるをもあせもえもよの水が如く見
あまくもあめの女房の匂れりとがまをひまを全
あらわすとあらわすとあらわすとあらわす

仙臺

瑟

廣庭直竹

山近

廣

廣庭直竹

新庄

廣

廣庭直竹

磯辺

廣

廣庭直竹

年

久

廣庭直竹

東折

廣

廣庭直竹

金

廣

廣庭直竹

良上

廣

廣庭直竹

豊

廣

廣庭直竹

天神林

廣

廣庭直竹

保

廣

廣庭直竹

鳥

廣

廣庭直竹

京

廣

廣庭直竹

真惠美

廣

廣庭直竹

壽

廣

廣庭直竹

山形

廣

廣庭直竹

清澄

廣

廣庭直竹

眞長

廣

廣庭直竹

小田原

廣

廣庭直竹

群子

廣

廣庭直竹

寿

廣

廣庭直竹

桃実

廣

廣庭直竹

水戸

廣

廣庭直竹

群子

廣

廣庭直竹

眞直

廣

廣庭直竹

水戸

廣

廣庭直竹

眞直

廣

廣庭直竹

水戸

廣

廣庭直竹

鳴音

廣

長岡

物をあつて若き度をせんじてむまびとあらはるの爲水
井のあそびの酒を飲むて水桶のたゞもひまく出力す
白川 水

白のまきの所を細工せし筆をひらひら水をか
氣仙沼 真

まわへひきの水を入せし筆をすまく水をか
全 唐

まの日をもせし筆をすまく水をか
仙臺 十字街

はあがへまく水を入せし筆をすまく水をか
伊勢屋 吉田 海代風

脚をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
十宇街 岩山 室田

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
吉田 海代風

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
岩山 室田

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
玉 美

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
下美 救時 真

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
京 盛

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
元 安

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
李

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
長岡

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
白川

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
新庄

手をあがめし水を入せし筆をすまく水をか
満葉

水鳥

麻生

岩城

真酒躬

大津

左原

乙

立

水戸

大津

岸

住

水戸

氣仙沼

貢

長

大津

道

記

九

岩城

暖

長岡

白川

入

芥川もひやあむこちせまの鬼一アの襷をぢろー

山形

青

朝の酒不むとう後あさみるハサウ熱をやりてうとも

市川

常

夕湯の水をのれてもつづひもあれぬほりて

前掛

道

中は使ふまことれどもかをひもとくも重ねとぞれ

来竹

記

経はしおよ拂へき事のゆゑ、わーの薬湯を食ふも

仙臺

常

ゆきのたゞそあより旅宿にそむくアシのま廻、

天神林

道

かほがのゆもあくの度をあせんとゆきをすは

真富貴

記

宿泊がのゆと常と程がんきのあせるとゆきを

鳥

道

人をすあひびりたまをとすれづれのゆきを

本

記

裏微加柵三
絹代

梅

道

裏微加柵二
大考の仲内の用をうつ白羽をとほくもとくも

田雀九

道

裏微加柵一
絹代の十日経川の絹代もあくひゆふとゆきを

名古屋

道

絹代は十日経川をとどきとゆきを

田雀九

道

目加柵三
絹代もあくひゆふとゆきを

房倉

道

目加柵二
絹代もあくひゆふとゆきを

全

道

目加柵一
絹代もあくひゆふとゆきを

長岡

道

絹代もあくひゆふとゆきを

仙臺

道

絹代もあくひゆふとゆきを

小

道

絹代もあくひゆふとゆきを

相深見

道

絹代もあくひゆふとゆきを

京

道

絹代もあくひゆふとゆきを

下總

道

絹代もあくひゆふとゆきを

真

道

絹代もあくひゆふとゆきを

金美都

道

絹代もあくひゆふとゆきを

立

道

波那曲櫻通漫

白川
氣仙沼
大津松代
道則

川谷
美
吞

長岡山
仙臺影

道
美
酒安入好

松代
美
吞

大津山
仙臺影

立
数

鷹狩

裏倣加花三
春

廣庵
美津井

氣仙沼
美津井

唐丸
新庄

仙臺影

小玉
室田

犬山
新庄

成文
為

千
全
成

福島
三千春

吞安

空

九

續

長

崔

齊

則

道

美

酒

安

立

数

影

仙臺

唐丸

新庄

美津井

氣仙沼

廣庵

崔齊

則道

東上

秋

湯宿をうかくの經をあがむに夜、いとまをせしもゆか
かりくともかねておもむくに夜の経をうかぐにん
ゆきくとて座すは裡をうめせしりゆの經すありをやうり

仙墓

真似人

の物物をうする者ハ若のひまむけの年とあ
の物物をうする者ハ若のひまむけの年とあ

越後

庭守

おもむくとて座すは裡をうめせしりゆの經すありをやうり

庄内

将雄

おもむくとて座すは裡をうめせしりゆの經すありをやうり

元季

波那相櫻通愛

炭窯

名古屋

波那相櫻通愛

炭窯

田雀丸

仙墓

大園

波那相櫻通愛

炭窯

大津

立

波那相櫻通愛

炭窯

立

波那相櫻通愛

炭窯

全

楓

春則

波那相櫻通愛

炭窯

新庄

美舟

室田惠成

式部

房得

越後

直

新庄

真

甲市川

美都成

炉火

裏微加花二

火

大門

光

貞九

裏微加花一

火

大道則

道則

正直

火

火

火

火

幼子のわくへよきとあをじと煙をかけぬるをせばせり

松代歌沙丸
水戸真鍊

高畠新庄繁枝

大河内あくたさきゆ一朝秋をさむら白き羊とまゆ

埋めの處をされどおもよ君のうつむ風情そぞ

水戸真税

水戸高烟

水戸松代

水戸新庄

水戸繁枝

水戸大河内

水戸水戸

除夜

波那細

水戸水戸

稻妻

裏機加也
大廣
通影匠
通氣清
通那坡
山內裏
鬼影通

月晚

風繁枝長戶水形玉山根加裏
風代風御內庄仙墓其長伎
風成貞戶御代風庄內御代
風風風風風風風風風風

音昔普鳴鳥長真吾九立
音音音音音音音音音音音音

立清濱華區匱九伎管鳳長戶水川
甲府長戶鳳管華區匱九伎管風九丸
吉田唐華區匱九伎管風九丸
左京全華區匱九伎管風九丸
仙墓莊全華區匱九伎管風九丸
裏機加也
大廣

目録

こうづれきのからも勢いりやせんうけの度乃月 桃実

裏後加花二

秋夜

秋の初はるの深樹うへてと静のこゑむらひのとくとく

米沢

秋の秋のち門にあむ候大不つまひ候也りかゝるを

月

目録去のゆれを候の多候老候うへる秋の秋をさ

内

秋の秋はあづきふれぐゑ葉へすむつ不あまう草をかみう

匝

ふゆく室ふ起がばれうむり候わむ秋の初もさ

春

秋のゆづれを候がふらんくじねや歎あさみつひう

左原

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

白川

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

商

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

前

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

酒

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

梅

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

丸

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

人

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

盛

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

則

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

九月九日

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

日

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

甲府

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

来新

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

唐

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

御

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

空

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

則

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

春

八月十五夜

裏後加花三

枝成

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

成

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

豊

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

秋

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

秋

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

秋

秋の秋のちうれを候がまうとあわきそ夢とまくひう

秋

庄内

月とそもむきを身へあうて白蝶の糸もあくまく

日妙加花一宿の解をうれて月を詠され物の序やうりきよも

さうづる意のうへあすけのうへの解をうて入る

三条左原貞

西の日秋の夜はあせんと葉脱ふとまゆ川

吉田守文

至のめあくうれとよくねをかまくうじもんへうひ

甲斐真風人

まちのとけひとよき事は因とぬくと月夜

吉田守文

一角もかくねま世のへあまうじせぬす移の月

甲府守文

生ぐもゆうじ日をかざれ六鶴を空すあまう月

吉田守文

も月のまほ風の吹かえとたまくらへうみ

吉田守文

月をうれゆかむともの移すかまくらへうみ

吉田守文

あまう月ハかくとよくべれゆ無からうれうき

吉田守文

月妙加花一宿の解をうれて月を詠され物の序やうりきよも

吉田守文

もくと西の月より秋のあくらむをあく秋の月

吉田守文

かうまくと月の月より秋のあくらむをあく秋の月

吉田守文

がうまくと月の月より秋のあくらむをあく秋の月

吉田守文

秋 風

七夕後朝

月妙
秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

印西胤直

青空の秋風ハ別れとまゆの移は

山形直根

秋桜のかりとまゆの移は

長岡直根

よづまの松やまの物も相小引けともあらわせば

新庄成

秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

大津立

秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

下總立

秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

河内鳥株

秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

真根守

秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

米守守

秋風かくい少絆をたまうて月と別れぬむ 春則

於鬼門守

夕立

裏微
早々とハ稻葉の火とちひむむのまへきるのを

乘折

庄内

真富貴

日妙
岸をたどりてはまくあげてつづのうふる御のむら

印西

百合丸

すむきーきのまのとづらも腹もありけり

小幡

持石和

多のまハ像の紫ありやれ薄あくまゆの朝

福島

千百

市中へ行と經とくまよハ御のまきんを之せ

新庄

柴持

えみゆ祁とすハタチ不因のめいの後故あり

真

産のすくなくともかく身をゆく月の浦

長岡

入船

梯の様お辭をまきりとせりやとまぐせらめり

氣仙沼

歌

火をうと廻りハ三月とせひとみだり

甲府

入船

御撥うとまよせ落一きゆかハ木の干桟も暖室にて

久

唐

村をすまくはるゝ身をすむる花波雷

貞雄

入船

産のあうつあたハ時あるほどありたせぬ在やまん

入船

残暑

裏微加三

大津

颶

ニ

日妙

山形

茂里

秋風のそぞれ

伊勢津

安富

秋風のそぞれ

氣仙沼

左原貢

秋風のそぞれ

於鬼門

久

秋風のそぞれ

梅丸

真鬼

秋風のそぞれ

千住米貞

成

秋風のそぞれ

麻生數成

山產

秋風のそぞれ

歌志久

久

波那細

初恋

裏微加三

入初の夜の空をはうきあひうかさをそよぐ

氣仙沼

貢

裏微加花二

かくとうつむく時のひれ葉をんのゆめかりとすま

福島
三千春

裏機
媒のにまつあつへ初くゑの初限のあとよが

東上

日奴加花二
ともかくはなばかくとおもてまこと神をぬくせり

岩城

日奴加花一
志つうと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

中央

日奴加花一
ひくのゆめをひれかうとくとくす

新潟

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

越後

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

雪

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

雄

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

益

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

九

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

雄

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

信

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

義

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

柴

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

岡部

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

新庄

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

南新保

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

鳥

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

柴

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

政

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

幾代丸

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

仙臺

日奴加花一
ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

庄内

忍意

波那細

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

秋

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

信濃

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

穗

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

河

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

頼

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

信濃

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

深

方

燃

古

仙臺

裏微加花二

一

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

名古屋

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

田雀丸

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

元季

ひくと極どあまかうりこまかくやまとくとくす

片倉常

透

越

篠苗

常

金文

三崎

芳風

目歌加花二

あそひの聲づづれとゞりゆてひやもよどつからせう

京
真恵美

今井

立

守

東条

奥向川原

一亭

来折

山

文

全

薄

墨

大津

唐

久

成

伊勢津

岡部

山積園

下毛田沼

大坂

酒

丸

人の頃を思ひて更に身をわざり物事生きの筋取上
まの程すまほのむまみとへのまみ歌ひ中央
あひ鳥の松よをひく西戸の門をほとんとく

不逢恋

裏歌加花三

おととのうみのうと洞をく庵をへうき店を移

市倉

をくえ移へんとゆきを君まく令かくくゆととひ

白石

行はるをとてあをとめぬくやく水をど門不とく

川

日歌加花二

思ふ秋の室の音無不流さるゐと人やされう

庄内

今をふくと被のあれひにしあれさくわくをぬれま

吾

育つてあくとて朝きぬ後あくわく一月の下

十字街

第うちひくとてきあつそのいもの、洞くさり

元季

上毛室田

赤井祐

英
空
嘉年子
芳
秀
下
美
方
文
園
道
駿
伊勢
賴
仙臺
大
初逢恋

波那細

水戸

三浦

豆

成

村松

厚

志

文

栗折

金

全

福磨

喜

薄墨

山形

貞

直根

琴足

長岡

茂久

真根人

半田

真富美

後朝恋

裏微加花三

裏微加花二

裏微加花一

わのふさんどひく命の聲うかがひうとまくまく

さのの聲れざるへあくの因ハ深稀のあきらめ

むかみハまだらませぬ不情あむつとまゆきの後

名古屋

真根人

仙臺

半田

水戸署

天神相

あまのいはと詠く鳥うりを人跡かとおほひのふ
きぬくの床の引れハ木ぬくとや財より程を下さき

据程くゆりてあわと進むてなまくもゆる象洞うみ

東上

多くの列ぎよを神壇不祭み祭日すてとすれ

長岡山

のまきみ引を表へはくよまかたちをゆつ

湖南

室の戸ハさへておきちねすあゆひやまの列盆

新泻水

わとりへうれがうすゝと名三そまがとひをあれえり

福

ぬく鶴あきの足引くと生むとひの洞くたり

信貴川

あぬの鶴の音かゆひもあそべ一聲の音あらとく

信

雀丸

逢不會恋

裏微加花三
従事のせく陰籠の網の巻

田雀丸

裏微加花四
従事のまも英じしきくらかどまくとおぬののま下

俊臣

目妙
トとまくとまれる種の所あくまのたくせくわぬあだだ

花

ひまくまくさす狂ひの聲をあつて切る様ぞくき

義

ひまくまくさす狂ひの聲をあつて切る様ぞくき

信

従事のまくとめくの聲を喜ぶてはくれて

来折

旅憲

裏微加花五
左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

甲新庄

積

むくまくとめく旅席の船をまくとまく船のまくとまく

仙臺

嘉年子

目妙加花二
まくまくとめく旅のまくとまくとまくとまくとまく

岩城大

久

丸

波那細
波那細

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

山浦

裏微加花三
左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

園

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

真酒躬

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

中央

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

大道

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

赤湯

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

千代生

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

空

左のまくとめく旅かでまくかのりてはく際もくまぐ

水

名吉屋

雪輔

席のゆきを嘗めやうかと今ひでひの程とすされ
おまわしにあらがせよゑのゆの極むかへるよ
照の因もむかせよゑんゆを要あらがむくやの宿

山邊

月久美

影の因もむかせよゑんゆを要あらがむくやの宿

名吉屋

光貞

至人の因もむかへ遠くねむせんかくとひの宿
參まう改てそれ裏かくをふれかの川があまと

神代

歌名

波那袖

片思恋

来折

秋

農園加老三
ねうりの洞のゆゑにほどとゑとゆゑとゑ人あつま
夏の不覺りありとと生てまゝ極のひだれ名ひのむ

鉢田

豆人

裏後
あらかじめかねりぬのがくうとくうぶれぬ姓を多く
象徴やむせびとむかくはく質やまくやを悉に喰ひか

片倉

常

見ゆあきらくく候のひかじ良きのうきを歸り

麻生

入

象徴の歸り肩根をきかせどらひとぬとの事あく
足元のとて移りゆかず

水戸

洲

長

足元のとて移りゆかず

庄内

川

常

足元のとて移りゆかず

元

李

意の地の員の行ひをあまくしても金玉一
切までもあふよとくまうゑあらそくぬのこゝつあま
かくのうとくとくそ一筋不覚のまとほのうとく

来折

真富斐

恨恋

颶々

々

裏微
性のうがきくごく角の狗をよつてノの恨め一
余もあんぞうとかくぐく盡きあはゆつまゐるは
日妙
経手の恨みをあへぬたのれあるとてと
待あへ一私を経てまくらをぬかしとてからす
天神林
曾丸
照道
馬をくらはんかわひん教となむがくも
恨みのゆれの神かたまくもはらがくすり不乾うづるを
馬をくらはんかわひん教となむがくも
樂眠政

庄内

全

吾毛

水雞

裏微加進

白川

わくわくきうち鶴をまよひせんと内うち門とたぎまえ
わくわくも鶴からうれんで隠すとまわるまく

庄内

春彦

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

盛岡

元李

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

新汚

福磨

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

長岡

入繁門

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

仙臺

真根人

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

来折

空

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

名古屋

弘器

わくわくのやんとまわるたまくまわるまく
わくわく門内のふるい夏物を水鶴のまわらすて

下毛曾戸

太良

蟬

裏後

久唐

甲府

久唐

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

牧施

米真猿

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

水戸

真鍊

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

水戸村

白川

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

閑根

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

仙臺

次丸

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

房暖

久唐

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

岩城

新泻

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

茂金

久唐

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

益磨

久唐

ま秋もあくぬを原ねく枝を葉絆せばぞゆゑみ

鳴音

持が身を喰らひて死湯と呼ぶ所もかのれの下

奥八首

はまじへてまくら湯のつゝまの枝下様ぞ鳴れ

牛布施

枝あら紀様つるもこのれんゆゆなまくいざりへとせ

山邊

發光より是のゆゑを御とよゆきあがりゆんゆま

目久美

まゆ山ふ銀へてゆまゆゆふやいわなぐの里人

津三浦

吉柳のあせこまつてみ柳づばへつらうど鳴ぞさうき

坂井若根

多喜のあせこまつてみ柳づばへつらうど鳴ぞさうき

甲府歌門

裏機

吟阿

日娘へ高橋挂られて草とのまご移小引振せり

高鳴音

そのまにすずめ流川へ個人の移もあらおがめを

歌波丸

野川の底やれな船の底を水よりたれくええ紀

繁苗

ひまくすのれり舟の底を仇未かうとひあざすも

庄内元季

鶴河

裏機加花三

月か雪かこれぞソリモキモヤの松風不移耶

内近

裏機富士川日のみゆとあれくふ室をばごう移を

水戸葉風

日娘加花三富士川日のみゆとあれくふ室をばごう移をひの松

東上赤湯央

日娘移廻

新の舟移をねぐらへ室をばごう

印西百合丸

移つひひ川のゆきを看過てよ鐘をとんひ下うひ

奥入

移つひひ川のゆきをのあまう猶移かぬ移移

仙基真根人

移つひひ川のゆきをのあまう猶移かぬ移移

水戸真鏡

移つひひ川のゆきをのあまう猶移かぬ移移

全渴卷

樹陰

裏機

拂ふふさればまくらゆ木柳の月とハまつて事

名古屋田雀丸

月娘拂ふふさればまくらゆ木柳の月とハまつて事

犬山金琴彦

拂ふふさればまくらゆ木柳の月とハまつて事

白川水野

扇

波那袖

市川

裏微加花三
裏微加花二
裏微加花一
裏微加花

仙臺

千
千
千
千
千
千
千
千
千
千
千

道
道
道
道
道
道
道
道
道
道
道

目
目
目
目
目
目
目
目
目
目
目

來折
來折

左原
左原

山
山
山
山
山
山
山
山
山
山

文

二
二
二
二
二
二
二
二
二
二
二

群子
群子

のと移りすかせしつまつて扇に扇ひゆすかやの扇
よどの風を扇お扇を引ひれ、日と月とを拂ううれ
あがんとくわくもれが星を拂う扇のあはせづけよ
移りゆきと拂お扇をさげをう扇ひゆすの一葉まつみ
拂ひふたも扇ひゆすのまふむむぬえよくえよ
まほの扇ひよどりと君扇あふまのぐいくま
移りふた扇ひうきの扇をバ風ひある白紙うとま
撫子

裏微加花二

宮音

裏微加花一

千
本

目
目

水戸
住

月
月

俊
長

水
水

新
附

水
水

春
則

水
水

千
守

水
水

唐
丸

水
水

庭
守

水
水

女
成

水
水

内
近

水
水

常
住

水
水

弘
昌

水
水

名
古
屋

水
水

長
岡

葉 水戸 風 盛 相 長 居 园 貞
葉水戸 道 光 神田 仙臺 大
東白川 酒 長居 喜山 岩上
喜山 長居 仙臺 仙臺 貞
喜山 長居 仙臺 貞
喜山 長居 仙臺 貞
喜山 長居 仙臺 貞

波那田 櫻酒愛
波那田 桃布施
波那田 牧布施
波那田 宮崎真
波那田 千子本

波那田 桃杷丸
波那田 真根人

波那田 藤家藏人

波那田 藏人

避暑

波那田 櫻酒愛
波那田 桃布施
波那田 牧布施
波那田 宮崎真
波那田 千子本
波那田 桃杷丸
波那田 真根人
波那田 藤家藏人
波那田 藏人

夏虫

波那田

波那田 桃布施
波那田 宮崎真
波那田 千子本
波那田 桃杷丸
波那田 真根人
波那田 藤家藏人
波那田 藏人

裏微加花三

裏微加花二

晩

半田
真富美

左内 吾丸

松風の音と枝葉の音があざれし房の前 群子

裏板

嗟ハ哉ヨリ松も落葉もうづの年不寄り

真寿門

数あれぬ葉あて化きの内よへとすみあらざる

成

目加花二 横雲ハ落葉の持氣もされ難かく壁乃處

白川

目加花一 さのうふりのあはれの音ハ御の音をもとの豹うす

文

山の音の葉も壁もふとけうそゆ里比ふせとう

真久

さくらはあめむかのゆ壁とおぢかす力と入る鶴

秋

あめむと鳴く音ハ無事にはかたうあ歌うて

真

まじめ船底が歌波四の音をあるくまくあを壁

東上

鳥すりあくくまく壁また歌んであく歌壁のえ

美

壁の音のうひもほのうそよぞちりぬ打せのむ

大

よだやの音と壁と歌ふはくまく壁のうみ

吹

よだやの音と壁と歌ふはくまく壁のうみ

成

裏板 松 八丁目 司方

桂樹の音の音やさきのうア松音まで五年のうち

岡部

年流ればあ枝孫枝老枝も壁枝寒一がまたの音

坂

見妙加花 いとぞ知れぬこりうけね枝と壁ふつゝ

成

目加花 かくまの音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

仙臺

中ひの音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

真根

松音の音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

九

甲府 宮崎 千本 菩成

松音の音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

久磨

水戸 潤巻 敦成

松音の音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

鳴音

松音の音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

廣庭

かくまの音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

津 真寿門

かくまの音ふとせむれどくわくの音をよきの男松

山積園

白川

木雀 櫻 来折
喜大坂 真梅

喜多院 蔵明 阿房

裏微加花

竹

盛岡

実

水戸

幸

裏微加花

長岡

起

目加花

市川

大

柳

常守

道

柳

守

守

柳

野辺

庭

柳

庄内

守

柳

松代

和

柳

千代

経

柳

庄内

入

柳

出羽住

季

柳

高成

入

鶴

苔

裏微加花

高成

入

裏機

朝すのよきとひそむを絆つたまふをすま泡せあ

内匠

うまく落の原の原ねふ落く村ね田在のやう

長岡

目放くふ葉全のれと村あつてはばくらふ掛せらん

室田

野鶴のうみの歌をうる猿とくのを詠ひる多喜のりん

京

沙湯へ芦ゆふ田在のれらひこれがあともわがの所

今井

あら度の然を解くかとせうすすみ泡風ふ逐ひか

立

頂のあくやまうら詠も見ゆともうだしかく

守

ふとせみのまみ詠ふこまうきえつみぬまや詠よち經

真琴

あら吹をばら吹のちじかまくわくれ毛の御つ

雨宮

石連

山

波那細

裏機加花

裏機加花

裏機

吉田

ニ御の作りてひとと人間のまゝのひとづかうと
つさればからうとを頂きをもものあらわしの山

全記

羅修ふまく國にゆるがれあきゆがれす
翁はぐくあゆく産業山代はゆきやのまよ

吉田佐原

草のむねおれは餘とまよふをゆけ

杉山

勁きれたら、山高や王峰の山あふかくそひの
まがくはやく風ハ時々ぬやうのま根め吹きまじ

蓑真琴

御事考ふせう重音やいだわがくをかくす

庄内元季

二葉の花かくよひの花はる皮筋りとくをまん

来野御空

川

波那田

蛭の種とくとまれ昔在の男事か、後の三度くみ枝成

新保

裏樹加花三
キノえれ、蛭の種くみを川切の手へあまのねくみ下總

佐原

裏樹加花三
かくみひくひく地つる空川の水くみくみと尉うぐめ千住

杉山

裏樹加花三
かくみひくひく地つる空川の水くみくみと尉うぐめ千住

真琴

蛭の半、空川の水くみ勢をせくみてひとぞくひくひく

長岡

蛭の半、空川の水くみ勢をせくみてひとぞくひくひく

庄内

蛭の半、空川の水くみ勢をせくみてひとぞくひくひく

月

蛭の半、空川の水くみ勢をせくみてひとぞくひくひく

新保

蛭の半、空川の水くみ勢をせくみてひとぞくひくひく

佐原

裏樹加花三

野

大津

立

皆事本をひきむかへてはくせん
裏板
そぞれの様なまきめどりあゆと
志年はま董わるやせに六店業納りてをもれられ
目次
其義本をひきむかへてはくせん
裏板

津

金

理

成

開

裏板

津

三井印とひきむかへてはくせん
裏板

津

山

引くからまくすとまんねが実ハ改てかか

長岡

さくまくすとまくしてあれとほぐむるうき

新庄

ひのきのまのまくへてはくせん
裏板

仙臺

福也もまくへてはくせん
裏板

大津

多用とされば葉を折りたまふるのせまかと

八丁目

里へとてはくせん
裏板

影園

桜もまくへてはくせん
裏板

高麗

多用とされば葉を折りたまふるのせまかと

星

里へとてはくせん
裏板

影園

橋

裏板

津

まくとまくひきむかへてはくせん
裏板

内西

四三二

裏板

吉田

さくまくへてはくせん
裏板

真牛

さくまくへてはくせん
裏板

庄内

さくまくへてはくせん
裏板

真牛

さくまくへてはくせん
裏板

名吉屋

さくまくへてはくせん
裏板

真牛

さくまくへてはくせん
裏板

左原

さくまくへてはくせん
裏板

真牛

さくまくへてはくせん
裏板

勝

さくまくへてはくせん
裏板

群子

さくまくへてはくせん
裏板

高成

さくまくへてはくせん
裏板

成

さくまくへてはくせん
裏板

秋穂

さくまくへてはくせん
裏板

秋穂

さくまくへてはくせん
裏板

吉田

さくまくへてはくせん
裏板

真牛

さくまくへてはくせん
裏板

真牛

さくまくへてはくせん
裏板

都鷲園

さくまくへてはくせん
裏板

真寿門

さくまくへてはくせん
裏板

入

さくまくへてはくせん
裏板

真寿門

雨宮 石連

更衣

裏微加花三

ちうをせーさるの匂ひ破はれかくおとせれまくおつせり

牧布施 真猿

裏微加花二

さるの匂ひ人の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

室田 玉

裏微加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

狸家 真

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

衆折 真

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

長岡 高成

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

貢 真雀

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

照道 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

戶塚 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

京 九

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

廣庭 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

雛三津 真托

加茂祭

裏微

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

庄内 吾 九

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

仙臺 島道 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

福島 三千春 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

此道 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

藤木 仲芳 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

梶村 真提 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

吉田 千善 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

山川 伸芳 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

批杷丸 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

藤水 住 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

梶村 仲芳 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

吉田 千善 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

芳賀 伸芳 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

残鳴 真托

目加花一

さるの匂ひ女の匂ひもあつてがく人の匂ひもあつて

藤家 春樹 真托

おまかで珍重せらるゝやうに思へ
松代 千 挽

まあるくがよきむすびの風のやうに思へ
磯邊 真國

引まのゆきすけがゆくとておもひて
年久

行かぬ湯やとおもひのまつておもひゆく
全

ゆゑよとよみづれのまきあらがまの珍へ
光貞

雉子

裏機
宿へりやねとあはれやうやう

本 薦

目妙加花一
そぞのゆゑどる程うなぐれてゆふ迷ふ里のまき

長岡 山 入

目妙加花二
まほほほんとお稚みハ翁の仲をゆめり

庄内 真牛

目妙加花三
ほほほとお稚みとお稚みおゆく

市川 美都成

躑躅

目妙加花二
まほほほとお稚みとお稚みおゆく

半田 真富美

目妙加花三
ほほほとお稚みとお稚みおゆく

佐原 仙基 信松 丸

あひのまきとお稚みとお稚みおゆく

島 道

八重梅

西山梅
梅の散布不毛アツベシトモウ

仙基 琴 賀

もも梅アツベシトモアシテハツヒタカシカ

松彦

あこたなごのあせ丹つドナヒキシテ

牧布施 真族

ちのやくわゆる鄉酒あらまじきも付れぬ

真寿門

落花

波那袖

まゆふきのむかわせむれむかげれをまゆふき

真直

ひづかく梢のむとゆちに風ハヤカニ霞光のゆうし

鳴音

今づりゆづりゆづりをあめ梅風の糸やかす

長岡 入

あやのそばのねだれまき風とくわらのあら柳うね

真寿門

まゆふきとゆづりゆづりをあめ梅風の里ふるをゆうり

岩城 暖丸

入のゆづりゆづりの海あれや風かくづくあらゆう

真惠美

島田院ちかくゆづりゆづりとこれば生破

苔成

苔成とゆづりゆづりとあつてうらじ往ともあら

数成

キテがくせでちうじ山風不なまひとむをむのトロト

羅三津

や桂風ふねづくあむむとくつむげつまの猿人

津十字街

後ふ水ふらかすばむちうがくもとみあはれつうとどま

牧布莊

山とくまむとくまむとくまむとくまむとくまむとくま

京廣度

月娘か花一ぬきの日風不後れてきかぬきとむらまくわ

仙臺慧

山風ふもむく財をわらけ一箇落もむじもん小猫をまひ

吉田千

あらゆくわらむかのうふ不被そ一がる人じまく

本記

楊柳ふあらう一或お一箇落もむじもん小猫をまひ

繩三津

若ものゆくひく毎ふお風ひそちふらと碑くこうう

吉田元照

入あそべく法師あまはむのちうのよまく接うひく

白川照

おまふきむまくまくひくそりまく金かあらぐちのう

京真恵美

桃花

目妙

三種一夢をまねく川とてあそべハのせん桃のを

京吞舟

源平とまざれてす桜のをよくまのひをせぬぞ

吉田真長

紅梅

目妙

紅梅のむすて枝をわれま店のうごめくある

神代歌名

時事とゆきと枝のむすてももすももさげまく

米次

幼くまゆううくまうくめうくめうくめうくめうく

更級

真琴

花未發

目妙

うのゆ候御まくめうくめうくめうくめうくめうく

数成根

七草もひま花とてまうくめうくめうくめうくめうく

萩膳彦

裏微加花

海路

うのゆのゆ候御まくめうくめうくめうくめうくめうく

白川

月娘か花二葉をゆくの解御人よりゆくと古をまくをゆく

佐原杉

月娘か花一白のうくめうくめうくめうくめうくめうく

長岡貢

伊豆の海おとぎを清毛政をう事もまくうくめうく

福岡吉躬

風うくめうくめうくめうくめうくめうくめうくめうく

小町真直

琴富矣

やの帳を取まひ酒舟へ之後のをまつて草子也
越の源流を書くべらの風流のとど國めてをひ

萩薄 真 琴
長岡

旅

裏後加花三

大門

旅の事と至るは旅の運秋かとすと度あびて

桑折

目後加花一

金文

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

大道

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

福島 梅盛

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

小町 富光

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

新庄 戸家

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

嘉年子

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

全

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

新庄 真柴

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

吉浦 濱道

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

吉田 嘉年子

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

京 吞舟

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

森 薩

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

吉田 成美

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

吉田 真美

別

波那細

小町

裏後

琴富貴

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

新庄 全

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

森 薩

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

庭守 鳴音

旅の事と旅の事とあらゆる所をせりふをすとてある

廣庭

山家

裏微

あらすじまきの徑人より一秋ふるくせよ
人の死もあらむはうとおれこめあひて後
日妙加花二
日妙加花一
世のゆきを活世の人のかみあるるそむくにまよ
あらうそあらどほくとしうたうかくまくら
日妙加花不食も食の内移りあけまくわらふのまく
おのば幼きをとくとれどせうまとあるひの下宿
うりそめ新かみとくもかわらぬる落葉かく雪
人を絶え移すあら生を傳ひく物や其ハ世をまよ
大道

田家

波那細
まひとくろくめひとすくめ門面のくね
裏微加花二
秋の日を像ふくがまのうれすわすれのまく
年儀すと種々村ちが類もと日や月の多
田家

日妙

身づくしぬ行まよのうとせうかまくや此秋の風
耕くあはくう然の男せうとねく秋もくの
苦々ちうくとく端をく原くまくせう川陸支の小田
秋の風を川せう樹が樹樹船をくらう積入ふく
珍くまくせうねくねくまくもかくの名の秋ハア
私國くわの名とくのあくのあくひめく松せういの
足湯せう皆の風せうつあくまくへりは風かくまく
小町
戸塚
琴富美
若城
真酒躬
新潟
眞稻
仙臺
眞都蔭
甲府
梅文
小田原
琴富美
崔金
税文

懷日

波那細櫻通愛
とくらくとくせう年とくれえくのくらむかくねうかく
裏微加花三
まひのくは聲も歌から聲も萬葉へかくの声をありと
裏微加花二
物語ふ立ちあらかうかぐのうつみをそ芳多かくん
裏微
うくありのうのううれううれぬ萬葉からひまう
うく波よのうのううれぬとおあと歌わ
千
篠塚
庄内
出羽住
安記
益政久
南新保
長岡
水支
琴富美
眞根人

かのうのうをとおなまちもくらひのうはる風
目妙いぬねとおひへ朝の古風を今へ國ふるみ叶ひの
せと教わる事ふたむきの年もうりあり

岩城

雪

酒

せと教わる事ふたむきの年もうりあり

庄内

真

津

白のと月夜をかん秋の夜とたゞ日月やあじてからん

高

来折

吾

物をめりうけのふをも今ま不平附りそちんれもせん

雨宮

高

持

おだときハをうそうすめひつめうそうとくわれ

丸

道

之

がの枝つんことひくまくとあおひるむむくらべバ

巴

壽

竹をめおみのぞくもあく起す庵をひとぬされを

舟

舟

京

舟

舟

おれくかんのゆきもせぬめばよと庵と者多き

全

廣

庭

おれが後す程にうとうとあわむ行を枝さめり

穗

鳥

おれが後す程にうとうとあわむ行を枝さめり

小船山

廣

庭

おれが後す程にうとうとあわむ行を枝さめり

穗

鳥

善のむじ絃ひ一物とみるも善やあひの際とかん 本
ゆう花ゆう秋のまほ仰やあきとく枝のれもうづび 貞雄

よきよきとまう人の不思ふがつともらゆもむす木葉

津 十字街

流れと萬々多かく汗の匂き汗ふ鴨子

水戸 貴川

やうやうとまう人のまづせんちあひとまうの初夏

提村 真堀

世済りのゆと若あらわ松のまくねを絆びる

全 二字守

乃達不活れとむとうとお花ぬれをあるまとうが

全 狹九

羽獲とむれと見れと鶯むまは被れて活れらせば

全 織志女

わ母のやまう春た勝れつと報しと善せとへホ

全 約守

わの花を咲ぬのとまわ神とめくせと里葉支

岩城 苗臣

わの花を咲ぬのとまわ神とめくせと里葉支

長岡 山入

秋の秋ハちのあらううのさくわからまつれとまうの風

水戸 駿門

釋教

目録加光三
御席席くたの世のあそりをあらまかとあふゆゆを

岩城 暖丸

目録加光三
皇天もまのまのとてハ常と身と難くまづて

盛岡 繁門

双四十九

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか
御のひ不二やあ華小園の下不三のひをひ仰今り 印西 富貴
述懐

小町 琴富貴
庄内 出羽住

裏微加花三
波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

藤塚 十穎

世の音と年月とまのひをひに波那笛
裏微加花二
波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

子龜

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

枝成

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

庄内 出羽住

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

下今町 直樹

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

大道舟

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

直繁

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

京 吞舟

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

沼津黒政

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

水戸 繁

波那笛
五の風とつゝせあ産すう後の世をもとめくいがまうか

外

至難の事多々とまづかず承りがむむせざり

福岡

波那細

祝

さきやかでけかといひやうあたは代を因みて
裏微 回す耳ふるいと因みれども本末の風の多
目妙 えをもくの國のやまとあ代のあそびとてくのま
えの花をまのねもよきからくま山代を坐美

重ねもく刈りあけ儀地のむくらに民ぞ坐美

新潟下美

波那細 やかでけかといひやうあたは代を因みて
裏微 回す耳ふるいと因みれども本末の風の多
目妙 えをもくの國のやまとあ代のあそびとてくのま
えの花をまのねもよきからくま山代を坐美

新潟下美

稻荷詣

裏微

狸塚

稻荷の神ゆとりて酒の肴はむむ移のま
又多くをまひと連れて稻荷の神をせん
目妙 おうのまと連れて稻荷の神をせん
成 稲荷の神とのまむれを教ふハセヒロモ因みて
三方の稻荷の神の祀廟の服を身をまくろ
守 約川

京

真恵美

高成

狸塚

高

成

長岡

長岡

入

山

かきくらのまつりの夢ゆゑへ初年 真以人

裏微

石清水臨時祭

仙臺

不西くかくとひきうつよの神のまつりを 千頬
裏微 神不西神とひきうつよの神のまつりを 千頬

京

真恵美

志賀山越

ひのきあひぬふへひなだめのまつりを 都鳥園
裏微 おもくわきあひぬふへひなだめのまつりを 都鳥園
日昇と白のまつりのまつりの三月のめを坐美 大津 飯時
ゆきとし神を拂ひてまつりのまつりを不見城 大津
おもくわきあひぬふへひなだめのまつりを 崎見 立

裏微 おもくわきあひぬふへひなだめのまつりを 長岡 入
日昇 おもくわきあひぬふへひなだめのまつりを 長岡 入
崔見

春日祭

裏微 おもくわきあひぬふへひなだめのまつりを 長岡 入
日昇 おもくわきあひぬふへひなだめのまつりを 長岡 入
崔見

賛

裏歌加花二

目録加花一

のりかわスチト

人を務めと難づ

難づ

と難づ

名古屋
田雀

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

入

糸遊

跡の日あまを尋ねるもあせてもつたがよき先 真長

喜の日あくまでそつともちくねてうやうへと 神代

孤飛はまゆかみあむふれのひよりのよきと 故名

目加花一あらのゑをほほのめをひんまどりと 吉田千

目加花一とあらかへるお移のめとあら慶叶 津 長岡

目加花一とあらかへるお移のめとあら慶叶 津 長岡

とあらかへるお移のめとあら慶叶 津 長岡

神代
吉田
千
善
空

津
長岡

春雨

豊加花三
よされどあらかへるお移のめとあら慶叶 津 長岡

とあらかへるお移のめとあら慶叶 津 長岡

津
長岡

津
長岡

津
長岡

津
長岡

豆

神代
吉田千
義

かひきの梅の節をとむる人よりかくまうる
めをひとへも拂へれどもはまゐのまゝ業あわざ
あひはせがうみのうごひふやどぐれをかたまうる

神代
吉田千

今保

苗

子

而うのまくじるせやとみかく波をあまくあまくあ
あうきはなにかのあひふりよりすまうるの宿

贊川
二字守
全

約守

苗

まゆと波せみ終やかん柳あらはのーく
教あくよひきあつときのハトミのあはまづみをう

寿

春日

波那袖

梅うさふほひせされまくまくまくらき
裏微加花二 まくらきあく運うく父母の面をあくとあくのせあく
裏微加花一 まくらきあく運うくおそひくのせあくとあくのせ
目妙 まくらきあく運うくの運うくよだかく延あくらうれ
目妙 まくらきあく運うくの運うくよだかく延あくらうれ
歌のれいめりあくきあくのくすく百種そとせゆふまのり
於鬼門 將雄 舍風 梁 美下

まゆの不滅、まゆのや、流の因をうてかうかの柳人 批杷丸
歌のれいめりあく運うくとくまくはまくまくはまくまくはまく
歌のれいめりあく運うくとくまくはまくまくはまくまくはまく
歌のれいめりあく運うくとくまくはまくまくはまくまくはまく
葉廣 真美
葉廣 真美

裏微加花三

善山

福下

群子

千住

新庄

若仙

美下

餘寒

裏微加花三

善山

福下

美下

群子

千住

新庄

若仙

美下

贊川

美下

真鶴

元日

波那袖

荷舟荷木のねうせの音と波んるる
あくはくかぎのふくらうる參へまくまく入射する
京内庄

裏微か花三

庄内

吾

序

名

川

室

屋

星

火

神代

真

歴

名

琴

丸

福岡

印西

舞

新

福

大沼

諸

賴

舟

雲

成

唐

真

類

歌謡歌雙兒百首十之卷終



